

次 目

立生大師の功勳	本	多	日	生
菩薩行に就て	本	多	日	生
寶物集	平	康	賴	
治法要旨	先	儒	遺	稿
良齋問話	安	積	信	
聖訓摘要	本	多	日	生
各地教信				

第三十三卷七月號



四月發行 本多日生著

信仰修養、思想
より論じたる

日蓮主義の本領

定價金貳圓五拾錢
五頁
【送料十二錢】

目次 (總の部)

- 一、信仰と修養と思想
- 一、信仰修養思想と立正大師
- 一、教育勅語の解釋と應用
- 一、思想の基準

(信仰の部)

- 一、眞の佛と眞の我
- 一、信心と正憶念
- 一、菩薩行

右は中央出版社の發行なるも統一發行所へ申込まるれば一割定價より割引する事となれり希望者は統一發行所へ申込まるべし

(修養の部)

- 一、新時代の婦人の修養
- 一、佛敎の六善事
- 一、日蓮聖人の人格

(思想の部)

- 一、國と人と敎
- 一、東洋思想の大共通點

以上

立正大師の功勳

一、序言 二、佛敎正統の擁護者 三、法華精髓の發揮者 四、菩薩行の應用者 五、法華語言の實行者

本多日生

一、序言

是れより「立正大師の功勳」と題して、立正大師即ち日蓮聖人が爲されたる功勳のごういふものであつたかといふことをお話ししようと思ふ。世間普通に日蓮聖人の功勳として傳へられて居るのは、法華經を弘め、題目を唱へて救はれることを教へられた、即ちこれまで觀念觀法の修行などを教へた難行の法華經を易修易行の信念に移して人々を救はれたことが洵に有難いことである。又佛敎が迂遠な厭世的な傾向を執つて居つたのを、立正安國の思想を掲げて、國家の爲に役立つ宗敎に引戻されたといふことが即

ち日蓮聖人の功績であるといふやうなことは、廣く知れ渡つて居る事柄で、勿論それは聖人の功勳に相違ないのであるが、併しその考へ方が相雜であるといふと、聖人の御趣意に適はぬやうになると思ふのである。

それはごういふ點かと言へば、日蓮聖人の功績を重んずる結果、日蓮聖人が佛敎の改革者である。元來佛敎はサウ現實的な、國家的な活き／＼したものではなかつたけれども、日蓮聖人がえらいものだから、さういふ寢呆けたやうな佛敎を燒直して、活き／＼したものに造り成したものである、佛敎の改造者である。その意味に於ては日蓮聖人は釋尊よりも

えらい者であるといふやうな事を言ひ出し甚しきは
信仰の中心にまで日蓮聖人を持來つて、日蓮中心の
信仰を捧げて、それが安心の上にて日蓮本佛論と
なつたり、迷信の上には今日の日蓮門下のいろ／＼
なる信仰を導き來つたりして、日蓮聖人を尊敬す
るは宜いけれども、その網格が大いに亂れて居る。
又題目が易修易行であるといふことも間違ひではな
いけれども、その易修易行といふ語の爲に、信仰の
内容が甚だ亂雑なものになり低級なものになつて、
佛教の本旨に遁はぬやうな所まで墮落して居る事も
あるのである。さういふ點に於て日蓮聖人の功勳を
モツと鮮明に、且つ意義深く領解することが必要で
あらうと思ふ。それが爲にこの講題を掲げて、自分
の信解して居る所を申述べて見ようと思ふのである。
それは大体に於て日蓮聖人が佛教の改造者であり、
革命者であるといふやうな風に考へて行くことが、
最も宜しくないと思ふ。本來の佛教そのものにけち

を附けるとか、釋尊に缺けた所があるといふやうな
考を一徹處でも加へて、さうして日蓮門下の人
日蓮聖人を崇尊したり、誇りとするやうな考がある
ならば、それは邪道であつて斷して許すことは出來
ないのである。その點は佛教の正統を擁護する立場
から言へば、さういふ思想は絶対に反對しなければ
ならぬ、私は左様なものを粉碎する立場に立つ者で
ある。どこまでも本來の佛教が完全無缺なるものと
して信じ、釋尊を絶対無上のものとして信する立場
に自分は立つて居るので、それが又日蓮聖人の命懸
けて闡はれた本旨であると信じて居る者である。或
は他の日蓮主義者と稱する人々とは、嚴密に言へば
その點に於ては違つて居るかも知れぬ、その意味を
一層明かにする爲に、二三の重要な點を申述べて見
ようと思ふ。

一、佛教正統の擁護者

立正大師は今申すが如くに、佛教の正統思想の擁
護者として立たれたので、佛教を造り變へるとかい
ふやうな慢心振つた考は少しも無い、極めて從順に
忠實に、釋尊の本旨のある所を一徹處も傷けまいと
いふ鞏固な信念に立つて居る人である。それは日蓮
聖人の言動の一切がさうなつて居るのであつて、後
の日蓮崇拜者が、日蓮聖人を崇めるが爲に、佛教そ
のものにけちを附けて掛かるやうな、あゝいふ不遜
の態度といふものは、若し日蓮聖人が世にお在で
なつたならば、そんな者は面會も許されなければ、
門下から破門されてしまふことは申すまでもないこ
とであると思ふ。

それはあらゆる點に於て立證することが出来るが、
大体聖人の一代の護法の奮闘努力といふものは「立
正安國論」に書かれて居るが如くに、

「弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何ぞ
佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや。」

といふことから出發して居るのである。自分は有難
い事には出家してお釋迦様のお弟子に加へて戴いて、
而も一切經の中の最も勝れて居るといふ法華經を信
奉する者となつた、さうして考へて見ると今日の佛
教は紛亂して居る、これを見捨て、置くといふ譯に
は行かない。ちようご思臣が帝王の信頼を受けて一
楠正成が後醍醐天皇に召出されて賊軍討伐の事を
命せられた時に、感激して奮起したやうな氣分がそ
こに動いて居るのである。自分は釋尊の愛弟として
法華經を信奉して居るのである、法華經の行者は佛
教の中心に立つて行くべきである。安樂行品に依れ
ば、

「文殊師利よ、轉輪聖王の諸の兵衆の大功ある者
を見ては心甚だ歡喜して、此の難信の殊の久し
く譬中に在りて安りに人に與へざるを以て今之
を與ふるが如く、如來も亦復是の如し」

とあつて、轉輪聖王はその戰に於ける最高殊勳者に

對して、髻の中に秘められて居る殊を特に與へられるといふことがある。その如くに自分は法の戰に於ける最高殊勳者を以て任じ、轉輪聖王の髻の中の殊を與へられるやうな光榮の位地に居るものである。それが佛教がこんな風になつて居るのを坐視して居つては相濟まぬといふ、大きな佛教の興隆擁護といふ道念に導かれて奮起せられたものである。それがどこまでも續いて居る觀念であつて、決して小さな宗旨を立てようとか、佛教の中に何か變つた色合のものをも一つ拵へようとかいふのではない。紛亂せる佛教を本來の過ち無きものに引戻して、釋尊の本意が明瞭になるやうにしたいといふことが抑々の出發點である。

この事は忠順なる佛教徒の誰もが當然考へなければならぬことである。ちようど日本の忠臣が陛下の大御心を奉戴してそれに適ふやうに、又大御心を安んじ奉るやうにといふことは、忠臣の誰しもが考へ

それは彼の「大薩造經」といふお經の中に、大薩造といふ佛弟子が非常な立派な話をするものであるから、嚴熾王といふ王様が感心して、「こんなに偉い大薩造は心の中では、俺はお釋迦様よりも偉いと考へて居るかも知れない、斯ういふ男を釋尊の前へ伴れて行つたら頭を低げるだらうか、低げないだらうか」といふやうなことを一寸考へた。さういふことを口外したのではないけれども、さういふ氣振りが見えたといふか、どういふ所でそれがわかつたか、お經では明言したとはなつていないけれども、大薩造がそれを察知したといふやうな風になつて居る。「あなたは今何を考へて居るか、私がお釋迦様よりも偉いとは思つて居ないかといふやうなことを今あなたは考へたでせう、それは怪しからぬことである、凡そ佛教徒を馬鹿にするのに、それ程激しい侮辱の仕方はない、大体その人よりも自分がえらいといふには、その人の缺點を認めなければならぬ、この點

と同じことで、釋尊の思召に適ふやうに、釋尊の御心を安んじ奉るやうにといふことが、高僧領袖は勿論、苟くも佛教徒であれば一貫して居る精神であらねばならぬ、それはモウ明瞭なことである。日本の忠臣に對して「お前もあはよくば日本の天子様よりも上のものにならうとか、それよりも偉いと讃めて貰ひたいとかいふやうな氣分があるだらう」といふやうな事を言つたならば、どれ程憤慨するかかわらないと同じ事で、忠實なる佛教徒が釋尊よりもえらいナンといふやうな謙辭を貰つてニコツと笑ふやうな者であつたならば、狂人病院へ入れなければならぬ。そんな事があるべきものではない、基督教徒にしてもその通りである、基督教徒に向つて、「お前は基督よりも少しえらいかな」と言はれてニコツと笑ふやうな信者があつたならば實におかしな事である。佛教徒はどこまでも釋尊に絶対の歸依信頼を捧げて居る者でなければならぬ。

に於ては俺の方が偉い、あの人はこの點に於て缺けて居るといふことを發見しなければ、その人より偉いといふ感は起らない、さうするには先づ釋尊に於ての缺點を認めて、此點が缺けて居るといふ所がなければならぬ、あなたは釋尊に對して何か缺けて居る所を認めたのか、先づその點を一つ指摘して御覽なさい、何處が缺けて居るか、缺けた所の無い完全なる方に對してそれよりも偉いといふやうなことの考へ様がないではありませぬか、あなたがさういふことを考へた以上は、何處でも宜いから釋尊に對する缺點を指摘して御覽なさい、缺點を指摘するところが出來ずして、尙ほ釋尊よりも私が偉いと考へて居るだらうと言つたならば、それは私が馬鹿者であるとおあなたは言つて居るのだ」と言つて、大薩造が非常に憤慨して居る。嚴熾王は頭を掻いて、「イヤ、悪かつた、勘辨して呉れ、君が怒るのは尤もだ、自分の考は悪かつた」と言つて平身低頭して居る。「そ

れならば宜しい、それでは謝罪の爲にこれから一緒に釋尊の所に参詣しよう、さうして私が釋尊の前にどういふ態度を執るか、面り御覽なさい」と言つて大薩造が王様を伴つて釋尊の所に來て、絶對の尊敬を拂つた態度をそこに見せて居るのである。

これはやはり法華部に屬する大薩造經といふお經に詳しく出て居る事である。ちようど日蓮聖人が佛教徒として國家諫曉などをやる気分は、この大薩造が嚴熾王に對すると同じ觀念を以て奮闘せられたのである。であるからその自分の模範人格者として考へられて居る大薩造などの態度に就て、さういふ事が歴々とお經に出て居るのに、その後から行かれる日蓮聖人が「あなたはお釋迦様よりも偉いでせう」ナンと言はれて「オーキにさうぢや」といふやうなことは考へられるものではない。左様な事を後から思ひなすといふのは、その者が無學であるからそんな事を考へるのである、忠臣や高僧の心事を知らな

れたのである。諸天善神にも見捨てられ、佛様にも見捨てられ、さういふ間違つた態度を續けて居るならば、この國は誰も護らなくなつてしまふだらう。併し日蓮はこの國に生れたものであるから、謗法の國となり、間違つた國となつても愛國の精神はどうしてもこの國を見捨てることは出来ないから、何とかしてこれを正しきに戻したいと思つて心を千々に砕いて居る。神も見捨て、佛も見捨て、日蓮は猶且つ見捨てないで居るといふ點に於て、今では日蓮が一人大事ナンであるといふ意味を言ひ表すので、ちようど道樂息子が親から勘當されてしまひ、お母さんも姉さんも誰も對手にしない、家へ歸つても門口から放り出されるのを、叔父さんが預つて歸つて、さうしていろ／＼世話を焼いて素行を矯してやらうとして居る。今になつてはモウお父さんもお母さんも構ひつけて呉れない、お父さんよりも大事なこの叔父が、今夜は家で寝て居れといふのに又コッソリ

いとこの陋劣なる者が、自分の頭腦が低いから、「そんな事を言うたちお祖師様が喜ぶだらう」と考へて言ふので、自分自身の人格の低劣である事を隠露するに過ぎないものである。私は左様に斷定して置く、そんな者が再び世の中に物を言はぬやうに、ハツキリ私は茲に言うて置く、そんな事を言ふ者は己れの人格の低劣さがそこに現はれるものである、苟くも道を學び、教に志す者にそんな考が出て來るものではない。

それは日蓮聖人の御遺文の中に「教主釋尊よりも大事の日蓮」といふ言葉がある、その言葉に就て誤解して居る者があるのであるが、これは前後の文意から考へて、何も釋尊よりも自分が偉いといふことではない。さういふ場合にさう言はれて居るかと言へば、日本の國が謗法と申して、正しき教に背いて間違つた事をだん／＼やつて居るに就て、釋尊から見捨てられてしまふといふことを日蓮聖人が慨か

裏口から投出すといふことがあるか」と言つて意見をやるやうな時に「今日に於ては父母よりも大事な叔父ではないか」斯ういふ言葉を使つたのである。その意味は、諸天善神に見捨てられた國家も猶且つ日蓮は思ひを残して居るといふ、聖人の愛國の哀情がそこに現れた言葉であつて、決して日蓮聖人と釋尊との地位を比較したやうな言葉ではないのである。それは前後の文章を能く讀んで見れば、今私が言ふ意味は歴然としてわかる事ナンである。さういふ所も寧ろ日蓮聖人は釋尊の尊い事を能く間違ひの無いやうに言ひ表されて居るのであつて、私が拜した御遺文の中に於ては、日蓮聖人が釋尊よりも自から尊いといふやうな意味を言ひ表されたといふ誤解を生ずるやうな所は一箇所も無い、寧ろその反對に、忠實に釋尊を尊敬せられて居る事は到る處にお説きになつて居るのである。それ故に日蓮聖人の精神とその行動といふものは、

何時も佛教の正統思想に復つて来ようとするのである。さういふ考を以て當時の比叡山の状態を見られた時に、果してどうであるか、傳教大師が比叡山を開創した當時の事柄を考へて見ると、南都六宗が分裂して居つたのを、法華經の思想に依つてこれを統一して、さうして傳教大師は比叡山を開かれたのである、然るにその後比叡山がいろ／＼の學問をやる爲に、比叡山に於ては天台、眞言、禪、念佛等のいろ／＼の學問を綜合してやつて居る。學問としてやるのは差支ないことであるけれども、その學問の爲に、眞言をやつた者が眞言へ摺つて、法華經よりも大日經の方が勝れるやうに考へたり、或は淨土門をやる者が惠心僧都の『往生要集』から、遂に法華よりも念佛の方が易行で宜しいといふやうに考へたり、だん／＼統一の中心である叡山から分裂して、澤山の宗旨が分れて出るやうになつて来た。そこで日蓮聖人は、どうしても佛教は法華經の思想の下に統一

されて進んで行くべきものであるといふこの觀念に基いて、佛教の分裂を否定する運動を起されたのである。

四箇格言と申してもやはりその意味合であつて、決して佛教の中に徒に戦を聞いて行かうといふのではない、佛教の分裂が悪いと言はれるのである。それは「安國論」に現れた思想を見れば能くわかる、法然上人が『選擇集』といふ書物を書いて念佛の思想を説いた、これは今日の宗教學で言ふところの單一神教であつて、澤山の佛様はあるけれども阿彌陀様に限るといふことを言ふのである。單一神教と言葉は能く似て居るが、唯一神教といふのが、これは澤山の神や佛を認めないので、神は一つしか無いと言ふ、基督教のやうに神は一人なりといふのは唯一神教である。澤山あるけれども、他のものはいけない、この佛一人に限るといふのはこれを單一神教と言ふ。淨土門の思想は、澤山の佛の中で阿彌陀

様に限るといふので、五種の正行雜行といふものを立て、阿彌陀如來を信じ、阿彌陀如來を禮拜し、讚歎し、供養し、阿彌陀如來の名號を稱へるのは宜いけれども、他のものは一切いかぬといふことを明瞭に言うて居る。それが後に一向宗と言つて、一向專南無阿彌陀佛といふことになつた、一向といふのは馬車馬式に、他のものを有難いと思つてはいかぬ、お釋迦様も天照太神も有難いと思つてはいかぬ、唯だ阿彌陀様に限るといふのである。そこで日蓮聖人がその『選擇集』の「捨、閉、闔、拋」といふ言葉を攻撃されたのである、他のものは捨て、しまへ、他のお經などは閉じてしまへ、披けて見てはいかぬ、開けよ、拋てよといふこの四字を掲げて『選擇集』に於ては一切の佛や神や結構なるお經悉く皆なこれを捨てさせてしまふ。その捨てよ、閉じよ、闔けよ、拋てよといふ四字は如何にも激しい言葉であるが、これを指摘して『選擇集』の狹隘固陋なる思想

を攻撃して、佛教の節大なる統一思想に來らなければならぬといふことを主張せられたのである。

それは今後と雖もやはり大事なことなのであつて、どうしても將來佛教が復活し、盛大になつて行かうとするには、そんな法然上人が言ふやうに、阿彌陀様でなければならぬ、お釋迦様もいけない、一切の佛菩薩、諸天神、一切經も悉くいけないといふやうな、左様な狹劣なる思想が佛教中に於て容認さるべきものではない。それ故に左様な極端な事を言つて、阿彌陀様だけに縋つて居つたところが、人間は教はれるどころではない、地獄に眞逆様に墮ちる、即ち念佛無間といふことを日蓮聖人が言つたが、それは何も激しい戦ひの言葉ではない、やはり佛教の正統思想である。

佛教の正統思想といふものは、佛を擧げれば釋迦如來に中心を置くといふことが、佛教の一切經を通じて認められる、思想である。小乗教に於て言へば

時間的に佛を認める、過去の七佛、未來に彌勒の出現といふことを認めるが、併し現在は釋迦牟尼佛である、十方には佛無し、唯だ釋迦一佛なりといふことをハッキリ定めて居るのである、又他の權大乘諸經に於ては十方に佛有りとするけれども、娑婆世界といふこの釋尊の教化せられる世界には、二佛の存在は何處にも許して居ない、娑婆世界の教主は我が釋迦牟尼佛に限るのである。だから阿彌陀佛と言へば必ず西方十萬億の佛國を過ぎてその向ふの安養世界の教主であるといふことを斷つてある、樂師如來と言へば東方淨瑠璃世界の教主であるといふやうに、一つの佛が出て來るならばこの世界のものではない、他國の者ちや、風來者ちやといふことをちやんと斷つてある、決してこの娑婆世界の衆生が信仰の對象とすべきものではないといふのが原則である。十方に佛有りとも雖も、娑婆世界の衆生は娑婆世界の教主釋尊に歸依すべきものである。王様といふ言葉があ

つたならば、何處の王様ちやといふことを考へなければいけない、日本國の天皇は唯だ一人あるのみである。その觀念は寧ろ佛教が教へたのである、「天に二日無く、國に二王無し」といふことは、佛教の經の中に到る處にある事であつて、それが日本の國體觀念の上にもハッキリ映つて來たのである、ごつちかと言へば佛教の方が本元である。(次續)

菩薩行に就て

本多日生

そこで其の四恩の意味合を能く心得て置かなければならぬ、父母の恩に就ては、佛は叮嚀にお説きになつて、父の恩、母の恩、孰れ優秀は無いけれども、殊に母に就ては其の恩の深い事を知らなければならぬ。是も世間の觀方と違ふので、世間では母の恩は輕いと日本の武士道や儒教では言つて居る、又一般人もさう考へて居る。佛教はそれに反對して居るものである。それは何かといふと、母は子供を産んだ時分からお腹の子供を氣にして、妊娠の初めより食物も注意し、体を冷してはいかぬとか、いろ／＼の注意を拂つて、さうして懐妊中にも相當自分の体に影響を受けながら、子供の事を案じて居る、殊にそれが生れる時には殆ど自分の命を奪られるかと思ふ

やうにあぶら汗をかいて苦しんで、ひどい奴だと子供を恨むべきほどであるが、子供が生れて呱呱の聲を挙げれば、まア／＼無事であつたか、この子は不具ではなかつたかと、自分の苦しみを忘れて子供の前途を祝福して居る者が母である。さうしてその子を育てるに就ては、自分の懐ろに入れ、膝の上に抱き、そこに小便をしたり乳を吐いたりするけれども、そんな事は少しも厭はないで日夜世話をして、胸からは甘露の泉、即ち乳を出してさうして子供に飲ませ、又おむつを取換へるといつても、始終しめつて居りはしないか注意して、少しでもしめつて居れば直に乾いたのと取換へてやる、若し夜中に蒲團でも濡らしたならば、自分は濡れた方へ寝返つて、濡れ

ない方へ子供を寝かすといふ風な親切は、まるで佛の心の通りである。その母が子供を大きくするのを「長養の恩」と言つてあるが、これを育て上げて呉れる恩は普天に彌ると言つて、その恩を廣げたならば、天に一パイになるほどの廣大な恩である。それ故に世間では山が高いと言ふけれども、母の恩に比ぶれば須彌山すらも尙ほ低しと言はねばならぬ、世間の一番重いものは大地であるけれども、この大地の全体の重さよりも母の恩は猶ほ重しと言はなければならぬ。母の乳を子供が飲むことは非常な量であるが、その僅かに一合の乳の恩と雖も何を以てこれを報すべきか、報することは出来ないものである。若し母親が洪水にでも出會つて、子供を抱いて泳ぐことか出来なければ、子供を捨て、自分だけ助かることは欲しない、子と共に溺れて死んでも子供を水の中に見放すことは出来ないと思へて居る。そのやうに母の恩といふものは辱げないものであるから、

家の内に母親が長生して居られるならば、その家は本當に幸福な家で、母無き家は寧ろ貧しき家と申して宜いのである。それ故に母に孝行すればそれが佛様に御供養をし、佛様に仕へて行くのとその功德に於て少しも相違はない。

汝等勤加修習して父母を孝養せよ、若し人あつて佛に供ふると福等しくして異なること無けん、應當に是の如く父母の恩を報すべし。

と説かれたのである、斯ういふ具合に佛は父母の恩に就て極力説いた、モウこれ以上の説きやうは無い、佛敎は親の恩を忘れて居るなどといふことは何處からそんな事が言へるか、まるで學問の無い馬鹿が言ふことである。これは一篇所や二篇所ではない、父母の恩を説くことに於て、佛の説ぐらゐ徹底して又興味のある説明は人類の文化の上に無いではないか、其の子聲を發すれば音楽を聞くが如く、胸臆の中より甘露の衆を出す。

といふやうな文章は、實に忘れることの出来ない價値を有つて居る、子供の傾け泣聲を聞いても音楽を聞くやうな歡喜を有つのが母の心ちやといふやうな言葉は、人類の文化に減さうとしても亡すことのない尊い言葉である。然るに佛敎は人倫を破却するとか、或は親の恩を知らぬ、君の恩を知らぬといふやうなことを言つて、御一新の時分に排佛論を唱へて、さういふ間違つた事を今尙ほ悪かつたとも言はずに、づう／＼しく構へ込んで行き居る、日本の社會といふものは、早晩開廣様の所に送られて「何故に汝はこの尊き如來の敎を誹謗するか」と言はれて、顔へ上つて恐入ることになるだらうと思ふ。

何時までもそんな事を言つて居るのは、あまりに日本人がわからな過ぎる、四恩の説などは舊い時分に日本の文化に既に融合して居つたものである。平重盛が孝ならんと欲すれば忠たること能はずと言つて慨いた時に、だん／＼苦しみ悶えて、最後やはり

佛法に依つて解決をしたのである、二世に四恩あり、尊恩を最となす」と日本外史にも書いてある、四恩といふものがある、君の恩、父母の恩、衆生の恩、三寶の恩といふものがあるが、日本の國民の立場から考へれば國王の恩が一番重いことになる。これはやはり佛敎の思想に依つて解決したので、父清盛が天子様に叛くといふことであつたから、重盛は日本國民の立場として考へたのである。それは日蓮聖人の開目鈔にも

慈父王の敵となれば父を捨て、王に參る、孝の至りなり

と解釋された。さうして重盛の時分ですへも、佛敎に四恩を説くなどと言つて居らぬ、「世に四恩あり」といふので、その當時の日本の一般道徳の中に織込まれて居る、佛敎は信じて居ない者でも、父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩といふ思想は日本の文化が認めて居つたのである、お経は見なくとも誰

にもわかるやうになつて居つたものである。今頃四恩といふことがわからぬナンといふことはない譯である。徳川の初めでも、林羅山といふものが儒教に酔拂つて佛教の悪口を言つた時分に上野東叡山を圍いた天海僧正が、京都からやつて来て、林羅山を捉へて、「佛教が人倫を破却するナンといふことをお前は言ふさうだが、佛教に四恩の説があることをお前は知らぬか、四恩とは何々であるか、答へて見よ」「へい」と言つた切り返答が出来ない、「モウ一遍言つて見ろ、その分には置かぬぞ」とやられて、「どうぞ勘辨して下さい」と言つて顔へ上つたといふ話がある。それを御一新の時分に又繰返して、天海僧正に言はしたならば「またやり居るか、この馬鹿奴が」と言はれるやうな事を滔々とやつた、味方が多勢になると馬鹿も強くなるものだ。斯の如く佛教に於て四恩を説いて居る、何故にこれが人倫を破却するものと言はれるか、或る外國人の如きは、日本の美風、

殊に國体が萬世一系に續いたのは、無論皇室の御聖徳に依ることには違ひないけれども、佛教のやうな穩かな宗教がこの國風を助けたことに依つて、國体は傷かすに續いたと言はなければならぬと、斯う申して居る。それは確に左様に考ふべき事であると思ふ。たゞ弓削道鏡一人ぐらゐを捉へて、佛教は國体を呪ふものだとか、國體を傷けるものだとかいふやうな事は、佛教の本質及び歴史に就て考へた時、非常に間違つた話である、左様な事は俗論であつて、苟も學問した者の言ふべき事ではない。

第二の衆生の恩に就ては、人間といふものは生れかはり死にかはりする時間の舊い方から言へば、誰と誰とがどういふ關係があるかも知れぬ、今日近所隣りのたゞ他人のやうに思つて居つても、それが二代三代の前には親類であつたやうに、兄弟であつたやうに、或は夫婦であつたやうに、非常に永い流轉を廻る間には、人各々の上の密接な關係は測り

知るべからざるものである。さうして現在生活して居る上に就ては、人生は共同の力に依らなければ何も出来ない、一方に米を作る者があれば、一方に商賣する者もあり、一方には政治を執る者もありして、分擔して世の中がうまく行くので、米ばかり作つたところが、政治を執る者も無く、國內の治安を維持する警察も無く、外國の侵略を防ぐ軍備も無い、唯だ百姓ばかりやつて居るといふことであつたならば、ちようど支那の馬賊みたいな者が始終出沒して来て、折角米を穫入れたと思ふ時分には、親も子も縛上げて置いて一逼に穫入れた米を擡つて行つてしまふ。さうして家へ歸つて見れば鶏も取られた、豚も取られた、米も粟も何も無い、他所へ行かうにもどうする事も出来なくなつてしまふ、翌年まで食ふ物も無くてマゴ／＼しなければならぬ。百姓が米を作つて、「俺が作つた米だ、俺のものだ」といふやうなことを一圖に思ふのは餘程念入の愚か者である、社會は

互に協力して生存を完うして居る。今頃共存共榮ナンといふ言葉を使はなくても、昔から佛教は衆生互に恩有りとなつて居た、その三千年の文化を有つて居るのである。それが日本の諺にもなつて、人生といふものは「旅は道連れ世は情二情は人の爲めならず」と言つて、同情を以て社會は構成されなければならぬといふことを教へた、面倒臭い理窟も何も要らない、旅は道連れである。旅行をしようと思つて停車場へ行つて待つて居る、靴もある、洋傘もある、風呂敷包もある、それを提げて便所へは行かれない、隣りの人に「ちよつとあなた見て居つて下さい」と頼む、その人間が皆な泥棒であつたならばどうする事も出来ない、靴も持ち風呂敷包を背負つて使所へ行かなければならぬ。どうしたところが社會といふものは互に扶け合つて行かなければならぬものである。今日そんな事を口では言ふけれども、事實共同の精神が廢れて、利己心、排他心、闘争心といふ

ものが非常に強く現れて来た、それは現代の文化の樞みである。佛教を普及せしめれば、人自ら精神が和いで、世の中は互に相扶合つて行くといふやうな気分になつて来る。日本に從來社會事業が起らなかつたのも、日本人にやさしい精神が無いらからではない、寧ろ社會事業にまで持つて行く必要がなかつたのである、親類が互に扶け合ふとか、知人が扶け合ふとかして、奉公人でも困るやうになつたら、まア辛抱して置いてやれといふ同情心が強いから、一人前の給料を拂ふだけの價値の無い爺でも寺男として、腰は曲つても「お前風呂だけ焚いたら宜しい、水が汲めなければ汲んでやるから火だけ燃やせ」といふやうにして使つたものである。さういふやうに個人々々が皆やさしい精神であつたから、さういふものが社會に溢れて出て、今日のやうな兵營式の社會事業をやらなくても済んだのである、大仕掛な兵營式の社會事業が盛んになるといふのは、だんだ

ん社會が悪くなつて而して後に出来た事である。佛教を盛んにすれば必ず社會相互の人情が厚くなるのは明瞭な事である。

その中には主従の關係、資本と勞働の關係といふやうな事も、皆な社會相互の協力に依つて解決されて居る、それ等の事もお經の中に十分に説いてあるのである。この頃論争されて居るところの生活の問題とか利益の分配とかいふやうな事は、昔もやはりあつたのである、佛は夙にその點を注意された。又人格の問題に就ても、奴隷廢止を釋尊が一番に唱へられた。西洋の奴隷廢止などはまだ日の淺い事である、奴隷廢止などといふ思想が何處にもまだ起らない時、三千年の前に釋尊は迦毘羅衛城の王子悉達太子として、立派な身分でありながら、その階級觀念を去つて、手に一鉢を持つて、如何なる陋巷に住める者でも人格を認めてその人間の前に平等を主張したのである。その時分には印度では毎朝奴隷の市が

立つて居つた、その奴隷解放の爲に極力お働きになつた。又旃陀羅とか首陀羅といふやうな下層階級の者が壓迫されて居る、それに對して釋迦は、自分の弟子となる者はどの階級からでも差別無しに之を迎へてさうして從來の階級を捨てさせる爲に姓を廢してしまつた、「四姓出家して同一鹹味となる」と言つた、一たび釋迦の門に入つた以上は姓の區別は無い。だから日本でも日蓮にも姓が無い、傳教にも姓が無い、弘法にも姓が無い、藤原傳教とか、源弘法とは言はない、如何なる階級から來ても構はない、人格を以て認めるといふので、總ての僧侶は、縦ひ皇族から出られても平民から出ても同じ扱ひをした。日本でも一休和尚などは皇族の出身である、氏素性などは言はないで、その人格を認めたものである。今頃人格の平等がどうちやとか斯うちやとか、西洋から受賣をしなくとも、東洋には釋迦の教に左様な事は最初から行はれて居るので、我々東洋人の誇り

であり、東洋人の名譽である譯である。そんな事も忘れてしまつて、何でも西洋から來たことに頭を低げてゴチャ／＼やる、それは學者の態度ではなからう。

社會の相互恩といふやうなことは實に立派な佛教の教である、今までの日本の教育の上に於ては社會恩といふものが十分に説かれて居なかつたから、そこに缺陷を生じて居るのである。震災後の國民精神作興の詔書にはその點をお示しになつて「博愛共存ノ誼ヲ篤クシ」と仰せられて、博愛とか共存共榮といふことが示さるゝやうになつたが、今までの教育の上にはそれが薄らいで居つた。天地の恩といふものは今尚ほハッキリしない、そこに日本教育の大缺點があり／＼と残つて居る。これもモウ少し経てば、天地の恩とか宗教の信仰とかいふことを言はなければならぬやうに、どうしてもなつて来る。まア少しづつチビリ／＼と降参して行き居るやうな譯で

て大海際を盡して國王に屬す。

王様の徳と國民全体の徳とを比べたならば、王様一人の徳の方が上なのである、それ故にその國家の榮へは國民の力もあるけれども、國民の力が九であるならば國王の力は十である。どうしても家を建てるに就ては柱が根本であるが如くに、國家の柱石、國家の基礎は國王にある。人民の幸福は王を根本と爲す、ちようど日本の國体の如くに、皇室の聖徳に依つて國家の興隆があり、人民の幸福があるといふことを説かれて居る。斯ういふ言葉は儒教にもなければ西洋の文化にも無い。

譬へば世間一切の堂殿、柱を根本となすが如く、人民の豊樂は王を根本となす。

と説かれた。之に就ては大薩蓮經なり、その他守護國界主經などには池の譬を擧げられて、池に棲んで居る鯉や鮒は、その池の中の龍の徳に依つて早魃が續いても水が盡きない、大雨が降つても堤防が壊れ

ある。小人非を文るが故に簡單な話が手間取る、君子なればサラリさつぱり過ちを改めて、有恩の處を明にすると佛が説かれたこの一言に依つて出直せば宜いのである、「佛敎の惡口などを言うたのは無學の至りであつた」と簡單に懺悔をすれば事明瞭である。あまりに我慢を押通し過ぎる。それは一人一個の事なれば、我慢で隣家のお内儀さんとの喧嘩を押通すも宜いけれども、國家社會の興隆に關する重大な事を、一時自分が誤解をしたからと言つて、それを何處までも突張るなどといふのは實に愚かな態度である。斯ういふ重大な事が將來非常に大きな影響を來すので、日本國民の精神の上に、唯だ國民精神とばかり言つて、大事な國民敎化を捨てた、そこに今までの國民精神が蝕まれたつゝあるではないか。

第三には國王の恩をお説きになつた、これも佛敎の説き方が最も能く徹底して居る。

國王の恩とは福德最勝、其の國界山河大地に於

ない、安樂に棲むことが出来る、龍の徳に依つて龍窟魚鼈悉く幸福を受けると説いて、ちようど日本の國家のやうに、鯉や鮒の力よりは龍の力が池をして安泰に保つて居るものぢやと教へて居る。斯ういふ佛敎が何で國体を呪ひ、人倫を外れたといふことが言ひ得られるか、これ程明瞭な事は儒敎の四書五經を見ても無い、又これまで日本の學者の書いたものにも、これ程ハッキリしたものは無い、佛敎ひとり國王の恩を説いて、我が國体に合する點に於て明瞭である。たゞ世間では天子様の有難いといふことを、無條件で有難い／＼と言ふ、それはどういふ譯ナンと言つて聴くのは間違つて居る、さういふ事は聴くべきものではない、黙つて引込んで居れと言つてごま化してしまふから、腹の中ではわかつて居る、言はして見れば譯のわからぬ、筋の立たぬやうな事ばかり言ふやうになる、そこに反動思想が起つて、グラ／＼騒ぐのである、これはどうしても佛敎

のやうな消化された思想を以て我が尊嚴なる國体を翼賛し奉ることが大事なのである。(次續)

増一阿含經

此の衆生の根原は度し易し、若し聞かざる者は永く法眼を失はん、此は應に法の遺子たるべし、猶ほ優鉢蓮華、拘牟頭華、芬陀利華の地より出づると雖も、未だ水上に出でず、亦未だ開敷せず、是の時彼の華漸々に生せんと欲するが故に、未だ水を出でず、或る時は此の華以て水上に出で、或る時此の華水の著する所とならざるが如し。

(一三三至二ノ三六ウ)

寶物集

平康頼

四、珠玉は寶か

されば寶の中には、玉こそ第一の寶とは申しけり。台浦の玉、崑岳の玉皆是れ徳なきにあらず、燕の昭王の珠、齊の威王の珠、寶にあらずと云ふ事なし。毘沙門天王の、焼けども盡させぬ福も、玉の力に依り、龍女が成佛を遂げしも、玉を捧し故也。此の故に卍和足を切られて血の涙を流し、大施太子の、一切衆生に寶を與へんために、龍宮城に只一人御座て珠を求め給ひし事を云ふ也。爰を以て華嚴經には、「一切の寶の中には、如意寶珠勝れたり」と説き、妙樂大師は、「如意寶の如きんば、天上の勝寶」と釋せり。實に如意珠などを得たらんには、五穀七寶、何

れか乏しき物あらん、稻稈には、現世を祈のる者は、粟を乞ふが如し。後世願ふ者は、稻を乞ふが如しと云へり。實に稻を得たらんには、願はずとも粟は得べき也。玉を得ては、願はずとも金を得べき者也。玉寶なる故に、一切の物を數る詞には、玉と云ふ言を副へて云へり。譬へば玉鬘、玉の簪、玉の臺玉の鬘なんど共云ふぞかし」と申せば、又傍より「人々玉は寶なり」と云へども、末代の凡夫の爲めには寶と云ふべからず、我朝には火取の玉、水取の玉の外に、徳をあらはす玉なし。然りと雖も、火は燈と云ふ物あれば、石の中より出でぬ。水は土を掘れば出づる也。此の外に如意珠、摩尼珠と言ふ玉は得る事も難く侍り。經ひ得たりとも、磨く様を知らず、

行ひ様をも知らず、磨ざれば石瓦の如し、行はざれば土砂に似たり」と申しぬれば、何にかは爲し待るべき哉、諸經の中に、或は高樓の中に持し或は檀の上に置きて、幡を懸け、香を燒き、八戒を持ちて行ふとは申したれども能く知る人あり難し。又自ら得たりとも、持つ事有がたく待るべし。弘法大師の惠慧和尚の手より、傳へし玉持ち難くして高野山に埋め、役行者の儲けたりし玉、大峯の玉置に納む。無盡意菩薩の供養せし玉の瓔珞、觀音すら二に分けて釋迦多寶に奉り給ひき。況や末世の此の比の人、是を寶として持てる事や有らん。

五、子は寶か

金翅鳥の玉を持ちたるも、食を求めて小龍を食ふ。大龍の玉を具へたる、猶ほ三熟の苦を脱れ難し。されば玉も無益に侍り、只人の身には、子に過ぎたる寶なし。人終に老ひ衰ふる事あり、貴賤賢愚を選ま

す、黒き髪は白く成り、赤き唇は色を失ひ、額には波を疊み、眉には高山の月を垂れて、骨強く腰かゞまり眼は昏く耳おぼろに成り、甘味は苦く替はり、温なる水はすゞしく成りて、萬事心に合はず、一切の人は坐に恨めしく、若きは頼みあり、若きに合すれば、老ひたるは頼みなし。老ひて久しき人なきが故に、是を老苦と云ふ。心あらん人、誰か嘆かざるべき、天竺の國王は、初めて白毛一筋生ひ出でしかば、炎魔王の一番の使ひ付きたりとて、出家して行ひ給ふ。震旦の白居易は、四十六の年、容を鏡に移して、涙を流して蓋を覆ひけり、又大聖世尊の、五十年になりて、満月の尊容衰へて、三十二相の姿頼れ給ふを見て、優陀延と申せし御弟子の、老苦を嘆む侍りき。況や末代の凡夫、如何此の苦を嘆かざるべき、されば此の心を、詩にも作り、歌にも讀めり、其證を申すべし。昔は京洛靡花の容となり、

今は江湖深例の翁となる。(白居易)

◎をし照るや難波の浦に燒鹽の、

辛くも我は老にける哉。(讀人不知)

◎何方に身を寄せまし世間に、

老を厭はぬ人しなれば。

◎替り行く鏡の影を見るからに、

老曾森の歎をぞする。

◎いつとて身の憂き事は替ねど、

昔は老を歎やはせし。

實に、老の姿舊にける形を、見る人は是れを惡み聞
く人彼を厭ふ、子にあらすば誰人か愛む者有らん
や、人の子の親の爲に實なる事能々其證を申すべし。
天竺に國あり、名をば安息國と云ふ。彼王、馬を好
み、飼ひ給ふ事いかに云ふ事を知らず。徐に
馬を飼ひ給ふ、其德至りて、葉の狹き草を食はせつ
れば、人を馬に成す術を習ひけり。又葉の廣き草を
食はせつれば、馬人に成り還る事ありき。此の如き

教たる如く、葉の廣き草を取りて、持ちて彼の馬に
食せれば、本の如く人に成りぬ。即ち我父也。相
ひ具して本國へ歸り來ると云へり。是は子にあらす
んば生きながら畜生に成りてこそは有らましか。又
孟宗と云ひし人の親、老ひ衰へて物食はざる病をし
けり。霜月の末、極月の初め計に、筍を食んと願ひ
ければ、筍と云ふものは、四月の末、五月の初比に
有る物にて侍るに、此比などは求め得がたきに、
今は竹の林も霜降り雪積りて、如何に求るとも得が
たからんとは思ひながら、孝養の志深き者なる故
に、雪霜を掻き別けて、竹の根毎に堀り求けるに、
雪の中に筍を求め得て、喜びに思ひて是を取りて、
親に奉り、老たる親の病を扶けたる事侍りき。子に
あらずんば、争か雪の中に筍を求むる事あらんや。
又伯瑜と云ふ人の母、極めて腹悪く心猛くして、伯
瑜を打つ事、幼少の昔より、長大の今に至るまで絶
る事なし。母漸老ひ衰へて、子を又打ちける時、

間、人を馬に成す事、其數を知らず。此の事をば知
らすして、一人の商人、彼の國へ行きぬ。國王喜んで、
前々の如く、葉の狹き草を食はせて、馬に成し
て繋ぎつ。商人の心は人なりと云へども、馬に成り
て歎き悲みけれども哀む人なし。去る程に、商人の
子父の歸らざる事を怪んで、彼の國へ尋ね行きて、
宿を借りて留りけるに、宿の主の彼の者に教へて云
はく、此の國は人を馬に成す事あり。馬に成されて
ゐる者、此の程も近くあり。其故は、他國より商人
來て、馬に成されて繋れたる由を申しければ、我父
馬に成されてけりと思ひ、心憂くて悲しく覺えけれ
ば、事の有様を細かに伺ひけり。家の主答へけるは、
葉狹き草の有るを取て食すれば、則ち人馬に成る、
又葉の廣き草を食すれば、馬則ち人に成る。然るに
まちかく馬に成されたる商人は、栗毛なる馬の眉に
斑あると云ひければ、教へたるまゝに行きて見れば、
此の馬我を見付けて、嘔ひ涙を流し悲む。宿の主の

伯瑜涙を流して泣き悲めり、母怪みて云はく「汝を
打つ事昔より今に絶る事なし。然ども一度も泣く事
なかりき。何とて今初めて泣き悲みて涙を流すや」と
伺ひければ、伯瑜答へけるは「我母年若く盛にて、
力強く御座す時、打ち給ひし杖は身にしみて痛かり
き。今年老ひ衰へ給へるにや、打ち給ふ杖は身に入
痛む事なし。されば我母の餘命、少く成り給へる事
の悲く覺え待るなり。全く杖の痛きにあらす」と答
ける。子ならざらん者は、如此思はんや。是のみ
ならず、丁蘭が木母、郭巨が金釜、白年が衾を脱ぎ、
王祥が氷に魚を得し事、皆孝養の事に侍るべし。
丁蘭が木母とは、母を失ひて後、彼の母の形を戀ひ
悲んで有りける故に、木を以て母の像を刻みて、生
きたりし時の様に孝養せし事也。又郭巨と云ふ者は、
親を養はんが爲に悲かりける子を山中に堀り埋みし
程に、天道の御悲憫ありて、金の釜を堀り出だす事
の有りし也。又白年が衾を脱ぎしも、親の寒かるら

んとて、衾を脱ぎし事あり。又王祥が親は、鮮魚なければ物を食はざる事を悲んで、氷の塞りたる江にまかりて見るに、魚氷を突き穿ちて跳り上る事也。箇様の事、細に「蒙求」孝子傳「なんどに申して侍る。又我朝にも、箇様の事は多く侍る。輕大臣と云ひける人、遣唐の使に渡り給ひけるを、如何なる事か有りけん。言はざる藥を服せて、身には繪を書き、頭には燈臺を打ちて、火を燈して燈臺鬼と名づけて有り」と云ふ事を、御子の勇宰相と云ふ人、ほかに傳へ聞きて、悲み給うて、萬里の波路を凌ぎ分けて、佗州振旦まで尋ね行きて見給ひければ、大臣涙を流して、手の指を食ひ切りて、其血を出して、かくぞ書き給ひける。

我は是れ日本花京の客なり、汝は郡ち同姓一宅の人。父となり子となる前世の契り、山を隔て海を隔つ戀情の呻み。

「百坂や八十坂こえて給ひてし、乳ぶさの報ひ今日ぞ我爲る」。又怪き女の有りけるが實律師を請じて形の如く佛師をして、手箱を布施にしたりけるを、開きて見ければ、かくぞ讀みて入れたりける。

「玉櫛笥かけこに塵もするさざりし二親ながら無身とも知れ」。左程に叶はぬ人も、親の孝養の志は深くぞ侍りける。それならず、親に志深く見ゆる人を歌にて少々申すべし。

限あれば今日脱捨つる藤衣
界てなき物は涙なりけり。藤原道信

思ひかねかたみに染めし墨染の
衣にさへも別れぬるかな。平棟仲

藤衣なご一年に限りけん
是計こそ記念に思ふに。源有房中將

鳥邊山思ひやるこそ悲しけれ
獨や苦の下に逝くらん。中納言成範

昔今の人、造無までも、如此志深く嘆き悲む事

年を経て涙を流す蓬蒿の宿、日を遂うて思を馳す
蘭菊の親み。

形は他州に破れて燈鬼と成る、争でか舊里に歸へりて斯の身を寄せん。

是れを見給ひけん子の御心の中、いかばかりか悲かりけん、さて唐土の帝に乞ひ請け奉りて、日本國へ相ひ具し奉りて歸り渡し給ひけるとぞ申し傳へたり。子にあらすんば、誰人か遙々の浪を分けて、唐土まで尋ね行かんや。又如何なる武士とも、親の爲に亡き跡までも、忌日報恩せぬ者やは侍る。況や心ある人、親に孝養するは珍しからぬ事に侍る。漢の明帝は、母の御爲に一年に二度までこそ忌日をしたまひけれ。二度と云ふは母の失せ給ひし日と、又我を生み給ひし日と也。人の子を生める時は、一定死に入る事の有る也。されば其心を思ひ入れて有りける故とぞ云へる。又行基菩薩の、母の爲に孝養報恩したまひけるには、かくぞ讀み給ひける。

も、子にあらざらん人の、誰か思ひ寄るべき。されば子なからん人は、心憂き事にこそ侍るべき、後世までも寶と成るは子にぞあるべき。(次續)

別譯雜阿含經

猶ほ盛滿なる月の無雲の虚空の中に、光明世界を照すに一切皆樂見するが如し、釋迦牟尼尊は世間の大導師なり、端嚴甚だ特特にして名聞悉く充滿す、月出づれば白蓮榮へ日現すれば紅蓮敷く佛に従つて化を受くる者は、譬へば華の敷榮するが如し、彼の宿の善根を開いて悉く道跡を見せしむ。

治法要旨

先儒遺稿

三、卷の上

●立志第一

人君は天の命をうけて、其國天下の主となり、國天下の父母なれば、これをよく治め玉ふこと、是其職分なり。是を能く治むるは、先づ能く治むべきこと、眞實に心の底から思ひ込み、是を丈夫にする玉ふべし。是を立志と云ふ。爰が第一のことにて、かうすわらねば手をおろすべき本なし。志立ち難くとも、そこを自分に引立て、丈夫にする玉ふべし。一旦は丈夫にすわつても、中だるみ易し。そこを又油断せず、随分引立て玉ふべし。中たるみしては、夫から次第に頼れて、行届き難し。

仁義を本として志を立つべし。利心から志を立て、は、誠の志に非ず。先祖の跡を踏まへ、國天下の主となり、下に立つ者を育てあげ教へたつるが、これ天の命、我身のなすべき職分なれば、其職分を守らずして、國天下の者に難儀を懸けては天の命に背き、不忠不孝の罪輕からずと、かく心得て國天下を十分に能く治めんと、深く強く思ひこみ、段々と手をおろして行くを、仁儀を本として、志を立つると云ふ。此如なれば、人君の道に叶ひ、其下も上の恩に感じ、上を貴む心厚く、速かに能く治まり、外國にも侮られず、子孫も衰へず。もし國天下亂れ、外國におかされては、吾身吾子孫の難儀、夫許りを苦み、夫を遁るゝ爲め許りに、國天下を能く治めん

と思ふ。是を利心から志を立つると云ふ。此如なれば能く治まりても行届かす。いか程自分に骨折りても、下其恩を感せず。たとへば人に頼むことある逆、其爲に物をやりては、結局我をさげすみ、悦ぶ心薄きと同じ。聖賢は國天下の爲めに國天下を治む。志、暗き人君は、我身の爲めに國天下を治む。いか程骨折りても、我身の爲めにすることは、町人百姓の世渡りと同様なれば、かゝる心にては、其下のもの、上の恩を感せぬも、理なり。此通りにては、身は人君なり逆、心は匹夫に似たり。耻かしきことならすや。

治世の君の心には、世に謀反人もなく、國に盜賊も少く、野に餓死人も稀なれば是迄の通りにて、世はよく治まりをると思ひ、有來りたるなりをさへ違へねば、夫で事すむ。また是より能く治むべきと思ふは、いらざるごと、かく心得居玉ふて、有來りたるなりに任せ、至極の事とし玉ふ方多し。心の

儘に振舞ひ、あり來りたる事を頼し玉ふからみれば、先づわるき君とはいはれねど、智慧暗く眞實たらぬことにて、人君の道に背き玉ふ心得なり。惣じて治世既に久敷成りては先祖のなし來りたること次第に頼れて、當時は頼れたる政多し。然るを今謀反も出來ず、盜賊も少きは、かの先代賢き先祖の取捌き、何となく世に弘まり、其蔭で大亂は發らぬなり。然るを今段々頼れたる政の通りに任せ、夫で大亂は發るまじと心得玉ふは、目の前に大亂は發らすとも、大亂の根次第にひろがり、終には大亂を生ずるなり。古人の詞にも亂の生ずること雷の如しと云へり。亂は思ひ懸なく生ずるものなるを、亂の發る迄も、亂は發らぬと油断すること、愚昧の至りなり。たとひ亂は發らすしても、大治を願ふ心なく、有來りたるなりに任せ、うかくと過し玉ふこそ、人君の道にあらす。まして亂の發ること、測り難し。急度志を立て、大治を願ひ玉ふべきことなり。

志を立て、夫許にては済まず。是を能く治むる大綱を知るべし。其國中は本よりのこと、天下の諸侯の、國に道を行ひ難きことなき様に取捌き、風化外國迄及び、外國に侮られず。亂れざる前より、亂れたる時の手當をなし、亂れたるときに、速かに是をしづめるは、天下を治むる大綱なり。一國の人を難儀させず道理に背かず、治をたもち、亂を防ぎ、天下の守りとなるは、國を治むる大綱なり。是をばきと吞込み、かくの如くに能く治むべきと、親切に思ひ込むを、是を誠の立志と云ふべし。

又國郡を治むる上に、夫々の重き目當あり。是をしかと心に懸けて不斷忘るべからず。何れの國逆も、先づ其國を難儀させず、道理に背かせまじきぞと心懸け、思込むは一統のことにて、其上に目當とする所あり。近國の押へに立てらるゝ國あり。其近國ののどくびなる故也。諸國の押へに立らるゝ國あり。其諸國ののどくびなる故也。外國の防ぎに立てらる

ゝ國あり。其外國に近き故なり。此國々は其押へ防ぎの頼れぬやうにと、常に心掛くべし。又天下を治むる家の守りに立置かるゝ國あり。是は天下を治むる人の、其一族を立てられたる國なり。此國は其守りを常に忘れず、其國を勝れて能く治め、天下を治むる人にも、たのもしく思はれ、諸侯の手本とも成りて、猥りに誂はず、猥りに怖れず、國の勢を失はず、大事に及びたるときは、一事とは後れまじきぞと、兼てより思ひ込み、しつかりとすわり居玉ふべきこと、かゝる國の主となつて、只一通りの國の様心に心得ては、其國の目當に背くべきこと歟、國天下を治むる大綱を知りたる上は、是を行届ける仕方辨へ、是を勤め行ふべし。ばつと大綱を知りても、取廻し方すわらねば、綱を持たずして魚を望む如し。此書第二編より後は、皆仕方すれども、先づ其惣くゝりを此下に論ず。

國天下をよく治むるは身を修むるを大本とす。是

れ大本の綱にのぶ。志を立つるは、是を治むる上の本也。治むる上に手をおろす時は、愛を本とすべし。愛とは俗に云ふ憐愍なり。憐愍とて、めたと人に物をやり、人を遊ばせおき、罪を猥りに緩めることではなし。親の子を可愛がる通りに、十人の子あれば、十人を皆可愛がり、大事に思ひ、夫々にせわをやき、随分精を出させ、藝を習はせ、わるきこととする子は打たゞき、只可愛がる許りでなく、色々と考へ辨へ、行届く様に取捌き、宜き人に仕立て、夫々片付けてやるなり。仕分は色々分るけれども皆一の可愛と云ふ所から出て、是れが誠可愛がるなり。上より下を可愛がること全く此心なるべし。只結構に、ものに構はぬと云ふは、實に可愛がるにてなし。可愛と云ふを根に立て、夫々にやるべき物をやり、ゆるむべきことは緩うし、行渡りてむらなき様に、親が子へ夫々に所領を分けてやる通りに、禮を定め法を立て、學問させ、家業を勤めさするは、親の子を教ふ

る心なり。埒明かぬとみゆれば、先づ軽く刑してこらし、夫にても直らねば、一人を刑して、萬民をたすくるは、親の子を折檻し、大勢の内役に立たぬ子は、尙當して仕廻ふ心なり。此心にて取捌くべし。此心ありて、政行届かぬことはなし。行届かぬは此心足らぬゆゑなり。憐みの心なく、理窟ばかりにて捌きては、其捌き届かず、されども憐みの心ありとも、其仕方わるければ、憐の心行届かず。

敬を用ゆべし。敬なければ其愛届かず。敬は何事によらず、差懸りたる事に我心を一筋にいれ、うかとせず、盡末にせず、大事にすることなり。大事にするとは、道理に違はぬ様にと、心懸けるをいふこと、萬事の根本にて、治邦の大事なり。文盲なる君相は、無性にわる念をいれ、夫を敬むと覺えること、誤なり。わる念を入れたるばかりにては、手間取りぐす付いて、用に立ち難く、却てし損ふこと有り。晋の殷浩と云ふ人、桓温が威を恐れ、遣はす

書簡の文言に誤あるべきかと氣遣ひ、封じては明けて見、又封じては又明けて見、餘りに再三明けて見て取違ひ、白紙をいれてやり、甚しく咎められ、禍に合ひたり。常に随分知る練り置いて、事の有る時には、及ぶだけはと非を考へて、速かに埒明けることとなり、兼て練り置かぬ知が俄かに無性に考へたるとても、各別の料簡出すべからず。結句狼狽廻りて、筋なき料簡の出づるものなり。物を書く人の、平生手習は怠り居て、狀かく時になり、俄にたしなむが如し。何として能く出来べきや。されば逆鱗末にすべきことに非ず。重きこと、輕きこと、を見分けて、重きことには、各別に念をいれ、本と要とに深く心を付け、是を第一に取扱へば、其末の細き所は、一通りに念を入れても、大なる誤は有るまじく、めたと何もかも一樣に心得ては入らぬことに、手間どりて、夫に取紛れては、肝要の重き所結句盡末になり、しぞこないあるものなり。さなくともぐすつき、

事におくれたは、害あること多く、下にたつものも、退屈してくるときは、是又宜しからず。季文子三思而後行、子聞之曰、再せばこれ可矣、其註に兼て理を窮むるを貴み、時に臨みて、猥に思ふことをたつとますといへり。扱是迄有來りたる事と其事の上の仕方、氣をつけ、是はいかなる譯ぞと、其譯を得と吞込んで、よきとあしきとをはきと見分け、よき事は勿論大切に守り、よきことの足らぬは憎し、あしきことは止め、悪きことを始むることは堅く是をせずかくの如くなるべし。其子細を知らず、よきと悪きとを見分けず、重なる目當を辨へず、只定りたるかたに任せ、夫に遠はぬ様に許りするは、たとへば儒者の我心に、はきと吞込ますして、師に聞きたる通りを、うか／＼と人に言ひきかせするに同じ。是にて仕損ひはなき様なれど、いつの間にか本を失ひ、骨を折つても、役に立たぬことあるべし。

よきことを始め、わるきことを止むるには、是を大事に心得、輕々しくすまじきことなれど、甚だわるきこと見するることならば、止めにききこと成とも、思ひ切つて、すつかりと早速止むべし。尤もはつきりと残らず止めるがよし。甚だはきと見するたることなれば、始め難きこと成とも、思ひ切てすつかりと早速始むべし。尤はつきりと残らず始むるがよし。おづ／＼手を出して片へらを直しては、直さぬに似たるものなり。又始むること遅ければ、用に立たぬ許りでなく遅きだけの害あり。一日も早きをよしとす。但是迄しきたりたる悪きことの内、輕きことの早速止めにくきことは、そろ／＼と止め、是迄しきたらぬ能きことの内、輕きことの早速始め憎きことは、そろ／＼始むることも有るべし。然れども捨置かず、常に深く心掛けて、必竟何卒改むるがよし。

夫を止むべからず。あしきことを民より願ふは、若利欲に迷ひ、天命を忘れて、是を望むことなればゆるさぬ迫害なく、結句民に益あり。民の願を餘儀なく思ひ、眼前に害なき途、あしきことをゆるせば、一旦其國其時に害なく、或は利ある様に見えても、必竟民の大害なるべし。又よきことを始め、あしきことを止めるからは、随分中たるみなく、末の續く様に、よく／＼固め置くべし。上のたるまぬを要とす。上にたるみあれば、速かに下に移ること也。されども續くまじきか途、控へ見合することに非ず。一日よきことを始め、一日わるきことを止れば、一日だけの仁なり。一日成とも、よきことを始め、あしきことを止めさすべし。よしあし分れば是非もなければ、はきと分れてゐるに、うろつき居るは、近頃残念にて、かひなき心得なり。(次續)

又あしきことは、たとひ輕きことにても、纒かも

良齋問話

安積信

五、自暴自棄

呂榮公の無好人の三字は、有徳者の言に非ずと云ふは、忠厚の言と謂ふべし。人は慾心を免れ難き者なれども、忠臣、孝子、貞女、烈婦に至ては、慾に引れず天地の正道を守りし者、古史に多く見えたり。今の世にても同じく天地の間に生れし人なり。忠臣、孝子、貞女、烈婦なしと謂ふべからず。忠孝の理は人の固有する性なれば、學ばずといへども、天質の美なる者は、能く行ふに至るべし。聖人は天下後世の人を待つに、善人君子を以て望み、教を立て人を化導するなり。然るに己より極めを付けて、慾の世界に生れたる者、いかで忠臣孝子に成るを得んや善

人君子に至るべしやと、誰も禦ぎ止る者なきに、自棄自暴するは、吾身を侮り輕んずるの甚きなり。我は桑間より生れたる身にても、天地の恩は報すべきなり。況や吾身は先祖の血統を嗣ぎ、父母の遺體なる尊き身なるを、慾の世界なりとて、道義を守らざるは、先祖父母を侮り、天地日月を輕するなり。佛説にては此身死しても再生すと云へども、未だ我は前世にては何の譚某なり、來世にては何の譚某と云ふ確定したる證據なし。空誕の説と謂ふべし。されば往古千萬年、來世千萬年の間吾身は只一身なり。其性命も六七十年の短き輕塵浮漚の身なれば、朝夕心力を盡し道義を守り、孝悌忠信の道を講究し、古の賢人君子と肩を比するならば、身死しても名は後

世を照すべし。是を眞の孝と稱すべし。曾子は孔門中の孝子なり。其言に三たび吾身を省るとあり。吾身二字甚重し。玩味すべしと、陸稼書の松陽講義に能く辨せり。凡そ人心の同じからざるは其面の如き者にて人間一生五十年なれば、人慾を極め歡樂を盡すがよしと云ふ人あり。人間一生五十年なれば、朝夕道義を講究し、早く古人の域に入り、誠の人に成りて死すべし。まだ道を聞かすして死すれば、醉生夢死して草木と同じく、泯滅すると云ふ者あり。知らず世の君子何れを取や否や。

六、立志第一

昔し顧長康人物を畫き、容易に瞳子を點せず。人の故を問へば精神は阿堵の中に在りと云ふ。阿堵とは俗語にて此の處と云ふが如し。瞳子を指すなり。人物を畫き眉目手足衣冠は備はりても、瞳子を點せざれば、全體死して精神なし。忽ち瞳子を點すれば、

精神發起して活動の勢を生ず。學者も是と同じ。志の立たざる者は學業に精神なく、茫々漠々として醉人の如く、右を扶れば左に倒れ、左を扶れば右に倒れ、左右を扶れば前後に顛覆す。孔孟の門に入り、耳提面命を受くるといへども長進は成し難し。況や、庸儒の教化すべき所に非ず。若し一旦奮然として志を立つる時は、精神堅凝にして學問の進む春湖の湧くが如し。されば學問も阿堵の中に在りと謂ふべし。孔子の憤せざるは啓せず、併せざるは發せず。一隅を擧げ三隅を以て反せざれば則ち復せざる也と云ふ意なり。我志篤く義理に於て通せざるあれば、併々憤々として通せんを求むる、盲者の視を忘れず、聾者の聽を忘れざる如くならば、一言の下に豁然開悟するあるべし。耶康節の穆伯長に従ひ、經義の疑難を質するに、穆伯長其端緒を開けば、康節云ふ其の後の意味は考へて見るべしとて、其端緒に就き推究して、精深を盡せしこと

は誠まことに學者がくしやの標準へうじゆんなり。學がくの成なる成ならざる志こころの有あり無なきに由よる。朝夕てうまつ提てい擧げして志こころを立たつる。是これ學者がくしや第一だいいち起頭きとうの工夫くふうなり。

朱子しゆしの萬事ばんじ成ならざる須すらく吾わがが志こころをせむべしと云いふは確信かくしんなり。志こころは萬事ばんじの基本きほんなり。志こころ立たつ時は精神せいしん純じゆん一いつにして天地てんちを動うごかし、鬼神きふじんを感じかんじ金石きんせきを貫つらくべし。朱子しゆしの陽氣やうき發はつする處ところ金石きんせき亦また透とほる精神せいしん一いつたび到いたる何事なにことか成ならざらんと云いふは尤なほも名言めいげん大將軍だいしやうじん中に在あり、法令ほうれん森嚴しんげん精せい明めい一いつ毫ごうの怠た氣き無なければ、士卒しそ皆みな畏おそれして退懦たいにうの氣きなく。大將だいしやう情弱じやうじやくなれば士卒しそ法令ほうれんを犯かす者もの多おほかるべし。志こころは一身いつしんの大將だいしやうにて耳目口鼻じもくこうびは皆みな士卒しそなり。志こころ誠まことに立たつ時は耳目口鼻じもくこうび種々しゆしゆの私し慾よくは退聽たいていするなり。論語ろんごに食飽じよくほうを求もとむる無なく、居安きあんを求もとむる無なしの古註ここちゆに、志こころ在ある有あて及およぶに暇いとまあらざる也なりと云いふ意味いみ深ふかし。道義だうぎに志こころ專せん一いつなれば、衣食じよくいしょく居住きぢゆうの區々くくの欲よくに及およぶ暇いとまは無なかるべし。朱子しゆしも此この言ことを集註じつしゆに用もちひたり。孟子まうしの其大者そのだいしやうを立たつ、其小者そのせうしや

奮ふるふ能あたはずと云いふ此この意いなり。且かつつ志こころす所ところは十年じゆんねん二十年にじゆんねんを論ろんせず一息いっせき存ぞんする間あひだは此この志こころ懈おろむべからず。斃たれて後のち已やむと思おもふべし。朱子しゆしは同安どうあん薄はくたる時とき、下郷かきやう僧寺そうじに在ありて、論語ろんご子夏しにかの門人もんじん小子せうじの章しやうを思量しやうりやうし、徹夜てつや睡ねむらず杜鵑とくけん之聲こゑを聞きくとあり。其その志こころの強毅ぢやうぎ想しやうふべし。臨終りんじゆうの前に大學だいがく誠意じやういの章しやうの註ちゆを改あらたむ。其志そのこころの高遠かうたんと想しやうふべし。朱子しゆしの萬一まんいつにも及およばざる者もの怠惰たいだして奮勵ふんれいせざれば小成せうせいにも至いたり難がたかるべし。

七、道義は眞樂

天下てんかの樂たのしみ道義だうぎに過すぎたるはなし。孔顔こうげんは勿論もちろんなり。後漢こうかん東平王とうへいおうも善ぜんを爲なす最もつとも樂たのしみしと云いふ。諸葛孔しよかくこう明めいも宰相さいしやうの職しやくに在ありて、天下てんかの人欲にんよくに於おては何事なにことにても得えざることなかるべし。然しかれども蜀しよくの後主こうしゆに奉ほうる書しよを見れば、一向かうがう聲色せいしよく貨利かゐりに心こころを置おかず、忠義ちゆうぎに力を盡つくせし也なり。古人こじんも今人こんじんも人情にんじやうに異ことなるはなかるべし。然しかるに道義だうぎはど樂たのしみしきはなしと云いふは定さだめて偽いつはりな

るべしと云いふものあり。是こゝは老子らうしに下士かし道だうを聞きき之これを笑わらふとは此事このことなり。二三才にさんさいの小兒せうじに小判せうはんと煎餅せんべいとを並ならべて何れを取とると云いはゞ、小兒せうじは煎餅せんべいを取とるべし。義ぎと利りと並ならべたらんには、小人せうじんは義ぎを捨すて利りを取とる小兒せうじの見識けんしやくと同じおなじきなり。我輩わがはい書しよを讀よみ、義利ぎりの辨わ内外ないがい輕重けいじゆうの分ぶんは少しは知しりたる様やうなれども、其味そのあじの深ふかき處ところ會得かいとくせざる故隣こりんの實じやくを數かずふる如ごとく、我物わがぶつに成なり難がたくやゝもすれば聲色せいしよく貨利かゐりの念ねん起おこり、外物げぶつの斤兩きんりやうは重おもく、道義だうぎの斤兩きんりやうは輕かろくなるなり。生なれてより物慾ぶつよくに習慣しやくくわんし、いつとなく其癖そのくせつき心の明德めいとく垢穢かうたい穢けして道義だうぎを行おふは太行たいがう蜀道しよくだうの險けんを行ゆく如ごとく、甚はなだ難がたに思おもふなり。誠まことに志こころを立て懈ゆる怠たいなく行なふときは、始はじめは難がたかるべし。後のちには漸やうやうく習熟しやくじやくして道義だうぎはど樂たのしみしきはなしと思おもふべし。是こゝは道義だうぎに習しれて不善ふぜんの事ことは不得手ふえすてになるなり。鄙いひしき所ところにも久ひさく住すめば都みやことなる。出羽でつゑの海上かいじやうに飛鳥とびと云いふ島しまあり。人民じんみん住居ぢゆうきよし漁獵りやくを業わざとす。秋田あきたより四十里しじゆり餘あり。此島このしまへ仙臺せんたいの

眼科げんかく赤松せきそう休亭きゆうていと云いふ人渡りしことあり。逗留たうりゆうの内八ないはち十餘じゆじゆの老婆らうたの語りしには、世よには馬うまと云いふ獸けものありと聞きけり。我生われせい前に一度馬いどもを見て死しにたしと。赤松せきそう呆あほうれて老婆らうたの如ごとき馬うまを見るあたはざる孤島ことうに一生しやうじゆうを送おくり、何なんの樂たのしみみあらんやと大おほに笑わらひしが、老婆らうた云いふ左ひだりに非あらず。此島このしまに住すめば相應たいおうに樂たのしみあり、世界せかいの繁華はんかには却かへつ勝かちれり。我隣わがりん家に若わかき娘むすめあり。容色ようしよく甚はなだ麗うつくし。秋田あきたの富商ふしやう妻つまにせんとて携たづねて秋田あきたに至いたりしに一いつ兩月りやうげつ居いりしが城下じやうげの繁華はんかに堪たへ兼ね再またび往ゆかず。世界せかいは餘あまり騒さわぎし、此島このしまの靜しずかなること善よしと云いへり。此事このことは仙臺せんたいの大谷おほや士由しゆの花徑はなぢやう樵話しやうわに載のす。是こゝにて住すば都みやこにて、孤島ことうの内うちにも久ひさしく習熟しやくじやくすれば樂たのしみあり況いはん仁義じんぎ天下てんかの安宅あんたく大路だいろなれば、漸やうやうく習熟しやくじやくに至いたるときは、花はなの都みやこよりも樂たのしみ深ふかからん。易やすに損そんは先に難がたうして後のちに易やすしとあり。忿いみを懲こらし慾よくを窒なぐは、損そんの卦くわの工夫くふうなり。是こゝも先まには難がたく後のちには易やすきに至いたると云いふ意いなり。

八、私慾は我敵

凡そ士たる者は、戰場に臨み忠義の爲に死するを本意とす。安逸に耽り酒色財貨に心を溺すは小人の事なり。泰平の時に在ても戰場の心持にて、物事に油断すべからず。孔子の語に、志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪ふを忘れずとあり。後漢の馬援は我身を馬革に裹み、郊野に棄てられんと云ふ。梁の王彥章は、豹死して皮を留め人死して名を留むと云ふ。豪傑の士の志を立つる思ふべし。泰平の時は酒色貨財を嗜む。種々の私慾は我敵と思ひ、志氣を勇猛にして打破り、身心を堅固に守るべし。私慾は吾身を害する大賊なり。是を破るは其功甲首を取るより大なるべし。朱子の克己の工夫を論じて云ふ、項羽の章邯と鉅鹿に戦ひし時、舟を沈め釜を破り、三日の糧を持ち必死となりて戦ふ如くすべしと王陽明の語に山中の賊を破るは易く、心中の賊を

破るは難しと。誠に心中私欲の敵を破るは、泰平の時戰場にて天地君父への大忠孝なるべし。

九、小勇を戒む

江府は大都會にて、五萬の士民輻湊の地なれば、途中にて無禮を行ふ者もあるべし。然るに其無禮を責めて口論となり。遂に殺傷に及ぶは大なる痴漢なり。尤も格外に無禮甚しく、士道の疵になるは容忍しがたきこともあれども、大體は宥免すべし。昔し或人坂田の金時に勇士に成るべき工夫を問ひしに臆病積古せよと教へたる事、星野葛山の武學拾粹に見えたり。是は深き意味あることにて凡そ勇士と云ふは慎み深き者にて、能く事理の輕重を辨じ、危き所に近よらず、人立多所に行かず、堪忍を第一として喧嘩口論をなさず、人に對し無禮を行はず、人無禮なることありても、敢て怒り取合はず、如此身を大切に守るは、吾身は君へ奉りし者にして、我自由

日本山部長。△全日午後七時於講堂本健兒大會を開催有田健一君、土持良進師、三谷會善師、松本聖晴師、等出演頗る盛況を呈せり。

京都活動教報

△五月一日於本山國語會「六度講行」有田宏道。△二日於本山講堂正會「法華經講義」萩原日道。△八日於成就院「菩薩行」有田宏道。△九日於正行院正行婦人會「作佛の道理」原田日勇。△十三日於本山宗組會、信仰貴重の理「原田日勇」。△十三日于治店員講話信仰の目的「原田日勇」。△十五日於學院講堂於修養講義「日蓮主義の本領」有田宏道。「日蓮上人御傳」吉塚通暎。△十六日於法光院吉塚通暎。△十八日於本山講堂例會講演「日蓮門下の現勢」有田宏道。「赤化思想と佛教」原田日勇。△廿六日午後五時於本山講堂講演會「法華經講義」本多日生現下。全七時半「共產黨事件と日蓮主義」本多日生現下。全九時半「四陣與道館」全題「本多日生現下」出演せられ講堂の聴衆に多大の感動を與へらる。△

廿八日本山國語會吉塚通暎。(龍馬)

九州教報

「久留米」四月二日野瀬宅△全五日正信會△全十二日同心會△何れも中原師講話。△全十五日八丁島寺崎宅「開會の辭」秋尾竹次郎。「佐渡に於ける春日蓮」中原師。△全日夜全氏宅にて「殉教者神四郎を偲ぶ」萩原光顯「中原師」。△全十七日本泰寺にて小泉師卒業報告式を慶修し、八幡開教の志願と抱負を演ぶ。△全十九日光行權餘宅にて主婚會講演、晝一時より「修養の第一義」小泉師。「醒めたる婦人の任務」中原師。△全日夜「信仰生活の讀誦」小泉師。「日本國民としての信仰」中原師。上瀬支部長の挨拶あり盛會裡に散會。△全廿七日本山忠誠宅「日蓮聖人の學風」中原師。△五月一日大塚安達宅「四種の幸福」中原師。△全五日正信會△全八日妙經婦人會△九日中畑平城宅「正觀本章と信仰意識」中原師。△十二日同心會△全廿一日久留米赤松社「開會の辭」同心支配人豊田豊氏。「人格の創造と

價値の生活」中原師。「訓示及實業」豊田支配人。來臨者二百名頗る盛會。

九州教報

「八幡」宗教は體驗した！燃ゆる信念の所有者小泉顯應師は、この標語を事實化せんとして、四月廿八日の開宗記念日を卜し、八幡市鐵町一丁目に居住を定め、街頭講演を擧げてゐる。△顯本教會、日蓮同心會、この二つの看板は北九州の人士に強烈な刺戟を清い輝きを投じてゐる。△廿八日晚天帆柱山の靈峰に黎明の讚美を誦し、唱經數刻。午後三時中原師導師の下に、八幡開教奉告式を厳修し、夜裝鐵所東門に於て、小泉師の路傍獅子吼あり、會すもの數百、信仰革新の第一歌謡が開かれた。△五月十三日伊東御經會記念傳道「日蓮聖人の受難と苦難の御跡を慕ひて」小泉師。「日蓮聖人の大生死觀」中原師。顯本堂に溢れ、路傍に立ち傾聽する數十名、教益甚大。

備前草生教報

△四月十八日午前十一時より香山法要修修。午後一時より檀信徒一統

